

第4回：論文投稿から掲載まで

Part 4. Processes from an Paper Submission to a Publication

中村 隆

1. 論文を投稿する

いよいよ論文を投稿します。論文投稿から掲載までのプロセスを図1に示します。

論文を送る際には、カバーレター（鏡文）を作成し、論文と併せて送るのが礼儀です。カバーレターには次に示す内容を書きます。

○カバーレター（「鏡文」）の内容

- ・編集者（エディター）への挨拶
- ・論文投稿の理由
- ・内容の説明（抄録の短縮版）
- ・過去に学会発表等をしたことがあれば抄録をつける。
- ・利益相反の開示
- ・著者全員が内容を確認している旨
- ・著者全員が著者資格（authorship）を満たしている旨
- ・著作権の譲渡（必要な場合）
- ・査読候補者を指名（論文誌による）

論文の採択に向けて編集者とのコミュニケーションはとても大切です。編集者の仕事が円滑に進みやすくなるよう、投稿した論文の目的と内容が一目で分かり、どの査読者へ回せば良いかを判断できるように情報提供をします。カバーレターが粗雑な場合は、査読に回される前に不採択になる可能性もあるのできちんと書きましょう。

論文が受理されると編集者より論文を受理した旨の連絡が来ます。

2. 査読（Peer review）とその対応

2-1. 査読

投稿された論文は編集者により複数のレフリー（査読者）に送られ、出版の価値があるかどうか審判を受けます。査読は研究自体や論文の評価を行うと同時に、論文全体の質を向上させることも目的の1つです。

査読者は同じ研究分野の専門家が選ばれ、特に指定が

なければ引用文献に記載の研究者に依頼が来ることが多いようです。競争の厳しい分野だと、ライバル研究者が査読者になる可能性も高いので、査読後に厳しいやりとりがあります。

査読が終わると編集者より査読結果が査読者のコメントとともに返されます。査読者は、論文の採択・不採択を勧告します。査読者の意見が分かれた場合には、採択の決定権限は編集者に一任されます。

査読結果は大まかに4つのパターン（図1の①～④）に分かれます。①の場合はほとんどなく、論文が採択される場合は大抵②か③です。②の場合は、内容については大きな変更は要求されず、表現上の軽微なものの修正が要求されます。③の場合は、方法論や結論の導き方に対する疑問が指摘され、その後、編集者や査読者との数回にわたる議論の末、採択の可否が決定されます。④の場合は、採択の可能性はほとんどないので、他の論文誌に投稿するか、論文の論理構成を見直して新しい論文として再度投稿するかを検討します。

2-2. 査読コメントへの対応

査読コメントは、適切なアドバイスもあれば査読者の誤解による理不尽な指摘もあります。否定的な査読者のコメントは、著者にとっては煩わしく、論文執筆にかけた多大な労力を考えると時には腹立たしくもあります。その時は落ち着いてコメントを読み返し、まずは事実関係の確認をします。そして、1つ1つの質問に誠意を持って回答します。大抵の場合、査読コメントは論文をより良く洗練するための好機会になりますので、前向きに捉えましょう。

査読者から指摘される表現上の修正の1つに言葉の使い方があげられます。同じ意味を複数の異なる言葉で表現したり、専門用語と一般用語を混同したりするのは読む側に混乱を招きます。1つの言葉に1つの意味を対応させることが原則です。専門用語は和文であればJIS用語を、英文であればISO用語を参考にします。また、新しい言葉は初出時に定義しなければなりません。英文誌の場合、ネイティブチェックを入れたかどうかの再確認もあります。日本語を話せる学生がだれでも良い論文を書ける訳ではないように、英語が話せる人がよい英語

国立障害者リハビリテーションセンター研究所 義肢装具技術研究部

Department of Prosthetics and Orthotics, Research Institute, National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities
Takashi NAKAMURA (PO, PhD)

（受理日 2017年11月14日）

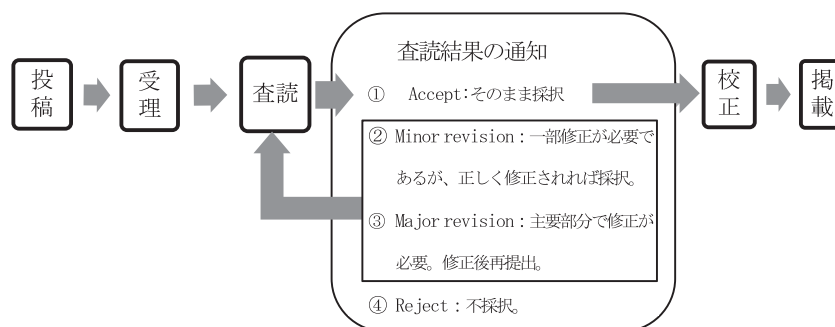


図1 論文投稿後のプロセス

論文が書ける訳ではありません。ネイティブチェックは専門領域の分かるネイティブにチェックしてもらうのがベストです。

図・写真の見栄えも指摘されます。実際の印刷物の大きさに印刷してみて確認することが必要です。同じレベルの研究内容でも、図表の書き方次第で査読者の評価は異なることがありますので、読ませるだけでなく、「見せる」論文となるように工夫することも重要です。

その他、引用文献が古かったり、適切な文献を引用していなかったりする場合にも修正を指摘されます。修正した結果、論文の文字数が規定を超えないように注意が必要です。

一方、内容についての指摘は研究の本質に関わるものなので、十分な議論をして対応することが必要です。よくある指摘は、実験方法は妥当か？ 使用機器は適切か？ 適用された統計解析手法は妥当か？ といった方法論に関するもので、さらに、論文が提示する結論は実験結果から一義的に導き出せるものであるか、についても疑問をぶつけられます。これらについて十分な説明ができない場合は追加実験を要請される場合もあり、大幅な修正を求められます。

査読者のコメントや指摘が見当外れで同意できない場合でも、丁寧に対応します。査読者が明らかに誤解している場合にも、査読者を攻めることなく、こちらの説明不足であったと理解して、よりわかりやすい表現に修正しましょう。データの解釈に疑義があった場合は、関連文献を引用し、主張を裏づけるために必要なデータを付け加えます。

査読者の意見すべてに同意する必要はありませんが、査読者のコメントに反論する場合は、意見を正当化する根拠を示してその理由を明確にすることが必要です。それでも査読者が理解してくれない場合には、意見の相違により喧嘩になる場合もあり、編集者に仲介役になってもらうこともあります。感情論ではなく、理論的な議論を進めることが重要です。

査読コメントに対しては、次のようにコメントの指示に従い修正したことを可能な限り丁寧に伝えます。

『「査読者 A」のコメントに従い、以下のように修正しました。修正前は△ページ△行「×××」という表現を、□□ページ□行に「○○○」と修正しました。』

また、一読すれば修正した内容を理解できるように、修正原稿とは別に修正コメントと修正箇所の対応表を作成します。

3. 論文採択から掲載まで

大きな問題がなければ、通常は数回のやり取りで採択が決定されます。採択決定通知の後、論文誌から校正の依頼が来ます。レイアウトの確認や誤字脱字を校正します。すでに査読が終わっているので、この時点での内容の修正は不可能です。掲載料が必要な場合は支払います。校正が終わったら、印刷され、めでたく論文誌に掲載されます。最近では印刷前に、Web 上で公開されることもあります。著者には別刷り（該当論文部分の印刷物またはPDF）が後日送付されます。査読を受けた論文は、その論文誌が認め、評価された論文と言うことで、研究者の実績としてその価値が認められます。

なお、多くの論文誌では、論文投稿時に著作権を出版社に譲渡します。論文掲載後、自らの執筆に論文の図表を使ったり、他の書籍に内容を掲載したりする場合には、論文誌の出版社の許可が必要ですので注意しましょう。

4. おわりに

4回にわたり論文投稿に至るプロセスを紹介しました。本来ならば各回の内容が1つのシリーズに相当する内容なので、かなり中身を省略して駆け足の説明となってしまうことをご了承ください。このシリーズを読んで、義肢装具士が論文を書くハードルが少しでも低くなることを切に願います。本シリーズを読んで論文を書いてみたくなった方、PO アカデミージャーナルへ投稿してみてください。すでに扉は開かれています。

本シリーズは第23回日本義肢装具士協会学術大会において行われた「平成28年度生涯学習セミナー：論文投稿の進め方」の講演内容を再構成したものです。